

和漢朗詠集と宮本武蔵

紫藤, 誠也

<https://doi.org/10.15017/12216>

出版情報 : 語文研究. 27, pp.17-27, 1969-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

和漢朗詠集と宮本武蔵

紫藤 誠也

戦気 寒流帯月澄如鏡 道案

大きく上半部に、「戦気」と二字、縦に墨書してすこし余白をおき、その下半部に、「寒流帯月澄如鏡」の七字が、くずした達筆で書かれている。その右わき、やや下よりに、「澄」と「如」の字の間の横に、小さく「道案」の署名がある。署名の上に、額形の朱印「二天」を押す。(料紙は紙)

(121.9×25.6cm 熊本県八代市 松井明之氏蔵)
この書跡は、宮本武蔵の真筆で、「二天」、「道案」とともにその号である。

宮本武蔵(正保二年(一六四五)五月十九日没。六十二才)——ふつう、この氏名で知られているが、その著書「五輪書」では、「生国播磨の武士新免武蔵藤原の玄信」と書いているように、藤原姓、名字は新免、武蔵と称し、玄信といった。(「武蔵守」とあるのは、流派をついだ門人よりの尊称) 現在、残っている武蔵の真筆「独行道」(注、1)には、「正保式年五月十二日」の日付けとともに、「新免武蔵玄信」に花押があり、額形の朱印「二天」を押している。武蔵の没後、養子の宮

本伊織が、承応三年(一六五四)豊前小倉に建てた「新免武蔵藤原玄信二天道案居士碑」(以下「小倉碑文」という)は、肥後熊本、泰勝寺第二世の春山の撰文である。その文中にも「武蔵玄信号二天」と記す。「道号を二天道案と号す」と武蔵の伝記「二天記」(豊田正脩著、同景英校。宝暦五年(一七五五)刊)にいう。これらからも、武蔵は、「二天」の号とともに、「道案」ともいったことがわかる。なお、「宮本」というのは、その出身の地名からきた通称であろう。

類似の額形「二天」印の使用のあとは、武蔵の絵画作品の中でも代表作に数えられる、「達磨の頂相図」「達磨の図」「梅にはとの図」(ともに細川護立氏蔵)、「さぎの図」(松井明之氏蔵)などに見られる。この「戦気」の書幅を伝来した松井家は、もと肥後藩主細川家の家老で、武蔵の肥後在住中より、死後の葬送まで、何かと親身の世話をした家柄である。

明治四十年(一九〇九)五月十九日(武蔵の命日)、熊本市の観衆館で、宮本武蔵遺蹟顕彰会が主催した武蔵の遺墨遺品の陳列品目録には、(注、2)

一、掛物 戦気云云 一幅

というのが二点、松井敏之男爵家蔵、寺尾雲起氏蔵とある。



池辺義象氏は、その著「宮本武蔵」の第八章、逸事で、

書は今、松井男爵家、及寺尾家に伝へたる幅、戦気寒流
帶月澄如鏡の字体、又寺尾家の兵法論の序、野田氏の独行
道、前田氏の五輪書、山尾氏の三十五箇条を見くらぶるに
筆力遵健、気魄ありて禅味を帯びたり。本書処々に挿入せ
しを見て心得べし。(注、3)

と述べ、巻頭、写真版をのせて、「武蔵自筆独行道」の下に、
「戦気」の幅を、「武蔵自筆（松井男爵蔵）」と紹介され
た。これをよく見ると、右の幅に似ていながら、署名の「二天
道楽」の四字は、ともに墨書してある。これは、当時寺尾家所
蔵の写真に、解説をあやまったものと考えられる。

なお右の池辺氏の記述の中で、武蔵の書跡と、現在確認でき
るものは、松井家の「戦気」の書と、「独行道」だけである。
寺尾家の「戦気」の書は所在不明。漢文体の「兵法論の序」は
掲載の写真版一葉で見ると、武蔵の著述とは断定しかねる。

「五輪書」と「三十五箇条」の自筆は、明治の当時、すでに存
在しなかつたのではなからうか。

池辺義象氏は、さらに

「寒流帶月澄如鏡」とは武蔵自から好みて常に書きたり
といへり。この人の心またかくの如きものありしならむ。
嗚呼武蔵は一の劍客のみにはあざざりしなり。近世の偉丈
夫なりしなり。(注、4)

と書かれたが、「寒流帶月澄如鏡」の七文字については、何も
ふれておられない。

これは、和漢朗詠集の上巻、「歳暮」と題する中に出ている。

寒流^{カンリウ} 帶^{ツキラ} 月^{ツキ} 澄^{オビテスメル} 如^{コト} 鏡^{カガミノゴシ}

夕吹^{タチ} 和^{シメニ} 霜^{フシ} 利^{トキ} 似^{カタニ} 刀^ニ 白^ニ

(山田孝雄校訂 和漢朗詠集) (注、5)

白楽天のこの詩句、白氏文集では、卷十六の、「江樓宴別」と題する七言律詩に見られる。

この「戦気」の書跡は、「戦気」といったん読み切り、「寒流月を帯びて澄めること鏡の如し」と読みつぐものと考えられる。それは、「寒流帶月澄如鏡」が、和漢朗詠集に載る白詩の一行である以上、「戦気」は、武蔵が、別に付け加えた語で、下の詩句に対する「表題」のようなものである。

武蔵は、武人が剣を執って戦いに臨む心境を説明するのに、「邪念がない」とか、「静中動あり動中静あり」などといったような、自己の知識や才覚をならべたててることをせず、ざぱりその心境に合致する、平素読みなれた和漢朗詠集の詩句をもつてしたものであろう。筆勢・内容ともに、武蔵その人を、もっともよく表現したものと言えるだろう。

「戦気」と表題して、七言一句を添えたところは、和漢朗詠集が題目をたてて詩歌を排列した趣向によく似ている。あるいは、「戦気」という表題は、「公案」に当り、「寒流帶月澄如鏡」の詩句は、「著語」に当るとも説明できるだろう。

この「戦気 寒流帶月澄如鏡」の書幅を見ると、武蔵は和漢朗詠集を、よく読んでいたように思われてくる。

二

武蔵が、和漢朗詠集を、読んでいたと思われる形跡は、多い。まず、武蔵が六十才のとき、寛永二十年（一六四三）十月十日、起筆した『五輪書』の地の巻を見よう。

第二水の巻、水を本として心を水になる（イす）也。水は方円のうつわものに随ひ、一てきと也、さうかいとなる。水に碧潭の色あり、きよき所をもちひて、一流のことを此巻に書頭す也。（注、6）

とある文中の語で、「一てき」さうかい、「碧潭の色」に注目したい。「五輪書」に先だつ武蔵の著述『兵法三十五箇条』（寛永十八年（一六四一）二月、細川忠利のために書いた）の、「心持の事」の文末にも、

水にへきたんの色あり、一滴もあり、滄海も在り。（下略）（注、7）

「一滴」は、「十五夜」の菅三品の「金膏一滴秋風露」に、「滄海」は、「山」の賀蘭遂の「百丈山」と題する「黛色迥臨蒼海上」に出る。「碧潭の色」は、「山水」の江澄明の「水復誰家染出碧潭之色」とある。

これは、朗詠集をよく読んでいたことの投影と考えられる。ここに、天明二年（一七八二）八月、丹羽信英の識語をもつ「新免武蔵先生伝記」を引いて、考察を進めてみたい。

一、先師、常々絵ヲ好ンデ画ケル、墨絵多シ。達磨ヲ書レシモ有、或ハ唐犬ヲ烏ノナブル処ヲ画、或ハ岡ニ雉子一羽居タル図有リ。大方墨絵ナリ。今モ江戸ニテ見当リ有リ我徒東武ニ行カバ、心ニカケテ可レ求コトナリ。印ハカママルノ形、中ニ古文字ニテ名乗アリ。絵大カタ古ビテ、絵所ニテモ印ヲ隠シテミスレバ、家ノ画ト見違コト有リトゾ。（中略）

又手筆モ抜群ナリキ。本国立花権右衛門増時所持スルハ、
春風桃李花開日 秋雨梧桐葉落時、是兵法ノ初終ナリト、
行文字ニ書レタリ。実ニ兵書ニ書レシ如ク、万ツニ於テ我
師匠ナシトハ、万事ニ付思ヒ知ラルコトナリ。(注、8)
この「伝記」には、武蔵を、「先師」と呼び、いろいろの事
跡をのべ、「絵画」と「書跡」についてふれていることに注目
したい。武蔵の経歴を考えるとき、「二天記」とともに、参考
になる記事が多い。

天保十四年(一八四三)に刊行されたといわれる源徳修著、
『擊劍叢談』巻之四には、

「武蔵流 円明流とも云」という項目をたてて、

「又 印秘伝の句に

春風桃李花開日 秋露梧桐葉落時

此一聯を以悟道の妙境とする也」(注、9)

右、二書の記述から、武蔵は、「春風……」の詩句を、「悟
道の妙境」としたことがわかる。

この詩句、和漢朗詠集には、「恋」の部に出ている。

春風 桃李花開日
ハルノカゼニ タウリノ ハナノヒラケルヒ

秋露 梧桐葉落時
アキノツユニ ゴトウノ ハノ オツル トキ

これも、白氏文集卷十二、感傷四の「長恨歌」に見られるが
『文集』では、「日」は「夜」、「露」は「雨」とある。

この「春風……」の書跡について、昭和十一年(一九三六)

に出版された添田達嶺氏の「画人宮本武蔵」では、

小倉の毛里家所蔵の「春風桃李花開日 秋露梧桐葉落時」
の十四文字などは、所謂文人書家の筆には見ることの出来
ない超凡脱俗せるものである。(注、10)

と述べ、巻頭には写真版を載せ、「武蔵書 春風桃李 小倉
毛里家蔵」と注記している。(戦後、所在を知らない) 写真
版で見ると、「是兵法之初終也 宮本武蔵」と細字を書きそえ
大きな印を捺しているようだが、武蔵の真筆とは認めにくい。
こういう武蔵筆といわれる「春風桃李……」の筆跡があること
は、たとえ現存のものも真筆ではないにしても、そういう内容
のことを、武蔵が言ったり、あるいは、書いたりしていたこと
を物語る。『擊劍叢談』の記事とも思いあわせて興味深い。

吉川英治氏は、『隨筆宮本武蔵』の、「彼の筆跡」で、

一 春風桃李花開時

秋露梧桐葉落時

二行、堅

を紹介して、この二行を、「有名な白楽天の長編詩『長恨歌』
の中の一章句である」。(注、11)と言われたが、これは誤り。

武蔵の愛唱したと思われる「春風……」の詩句は、「……
花開日……露……葉落時」という和漢朗詠集中のもので、長恨
歌の「……夜……雨……」とは、ちがっている。

このように、「五輪書」に見る漢語の使用例や、「春風桃李
……」の詩句を兵法の悟道の秘訣にしたこと、それは長恨
歌に出る有名な詩句とはいえ、朗詠集にある用字でしている
ことは、武蔵の和漢朗詠集への傾倒と、大いに関連があるだろ
う。

武蔵には俳諧作品がある。そしてそれにも和漢朗詠集を愛読した形跡がみとめられる。昭和十七年七月号の「俳句研究」に発表された、故杉浦正一郎博士の「宮本武蔵の俳諧」という論文がある。それには天理図書館の綿屋文庫本中にある「鈍屑集」、**「到来集」**に見える武蔵の作品について、すぐれた見解がのべられている。さきほど、天理図書館のご好意により、この二本とも調査することができたので、私見を加えてみたい。ともに柳亭種彦の手沢本で、種彦自筆の書き入れがある。武蔵の俳諧作品には、早く柳亭種彦が注目して、さらに杉浦博士によつて発掘紹介されたことになる。

『鈍屑集』は、『鈍屑』ともよばれる中本七巻七冊の俳諧集である。備前片上の住人、岡本仁意胤及の編。北村季吟の跋がつく、万治二年（一六五九）の刊行で、これは武蔵の没後十四年に当る。（京都、西田庄兵衛開板）

著考、岡本胤及は、「貞徳門の古い俳人で、中国筋随一の中心人物、**「医を以て業とす」**（誹家大系図、生川春明）とあるが、松江維舟の、「九州旅行」（仮題）には、筑紫よりの帰途胤及と出会つたと見えて、『雪の児島筆に見こしの絵島哉 維舟』の一句をものし、其前書に「岡本仁意胤及絵師」とあつて画家であつたと思われる」という杉浦博士の説明がある。

武蔵の作品が、どういふ事情で入集しているのかよくわからない。胤及と、彼の郷土が近かつたためか、あるいは、松江維舟のいうように、胤及が絵師であつたとすれば、武蔵の絵画文

芸に、格別、関心を持っていたのかとも思われる。

『鈍屑集』には、京・大坂・江戸などの連中の名も見えるが大部分は、播州、作州、備中、備後、備前の人々で、その中に九州人は、長崎の竹翁と、小倉の無何の二人だけである。

巻五の付句の巻末に「句引」がついていて、三十六丁裏に、小倉の住として

無何 二

の句数が記してある。この「無何」が武蔵である。（注、12）杉浦博士が調査されたところ、『鈍屑集』は、七巻全部そろつていなかったため、「夏」の句一句だけを紹介されて、

「無何の、知られざる今一句は、春秋、冬の三巻中のどこかに収められている筈である。『鈍屑集』の之等の巻が発見されたならば、どんな句が収められて居るか、興味のある問題である」と前記論文中にも書かれた。

さいわい、影写本が見られる現在、「今一句」は、巻一の「春」にある。「句引」どおり、無何の「二句」ともに、入集している。

巻一の、「ハル 廿二丁裏」、「梅」の部にまず出る。

鐘梅のさきとをれかな春三月 宮木氏武蔵 無何
「宮木氏」とあるのは、「宮本氏」の誤写である。（巻二夏の版本を見ても、宮本の「本」が、最後の横いちを、縦ぼうに半分かけているだけである。）

この「春三月」の語は、和漢朗詠集の、「閏三月」の項に出ている。

コトシノ ジュンハ
今年 閏 在ニ 春 三月ニ

アサヘミル キン リヨウノイチグ エツノハナヲ
刺 見 金 陵 一月 花。

陸侍御

「鐘梅のさきとをれかな」に「春三月」の語をつづけたのは朗詠集に「今年閏在春三月」という詩句があることを知って、使用したものと見られる。句中の「春三月」は、「閏三月」の意味におきかえられる。

「閏三月」という項目は、「千載佳句」など、そのころの漢詩書類書や、勅撰歌集・古今和歌六帖などの部類とは相重ならない、和漢朗詠集独自の項目の一つである。



朗詠集の、「閏三月」の項目には、漢家の詩句一（「今年閏在春三月」）、本朝の摘句一（「今年又有春序」源順）、詩句一（「同題」藤滋藤）と、和歌一首（「やよひにうるふ月ありけるとしよみける伊勢」古今集、春上）、『伊勢集下』には「三月ふたつあるとし」とある）を収めている。

「閏三月」というのは、「やよひにうるふ月あり」で、「今年又有春」とか、「三月ふたつある」というその喜びにあふれた語である。朗詠集の、すぐ前に出る項目「三月尽」で、「留春春不駐」、「惆悵春帰留不得」（ともに白詩）などを読みあわせると、この喜びはよりはっきり知られる。

「春三月」の語に、こういう背景があることよって、武蔵の「鑪梅」の句に生命がみなぎる。例年より春の季節が、ひと月余分に加わった今。「鑪梅」の天まで突き抜ける若い幹。鑪の「穂先」にも似たその幹の先端。「さき」には、鑪の穂「先」とともに、梅が「咲き」を懸けている。そして「さきとをれかな」とよむ。言葉の懸りの面白さを追う点では、当時流行の「貞門俳諧」調の句風である。朗詠集をふまえていること、とともに、この句には、武人武蔵を反映している。

この「鑪梅」の句を、今残っている武蔵の画業に関連させてみると、さらに興味深い。「梅とはとの凶」（細川護立氏蔵、重文）は、この句境と一致するようである。画面、中央やや下に、はとが梅の枝にとまっている。右よりに、古木から天まで突き抜けて伸びるやり梅の若い幹。全面のほとんど四分の三の長さをしめて、まさに「さきとをれかな」。梅によく見られる伸びかたではあるが、一方には発句となり、一方では画題となっている。作句と作画の時期は、同一でなくとも。

武蔵が、閑日月をすごしたのは、『五輪書』の記述から見てだいたい五十才以後であろう。その年代で、閏三月があったのは、『三正綜覧』によると、寛永十四年（一六三七）で、武蔵五十四才。このころ、武蔵は、小倉に在住したといわれる。『鉤屑集』の句引に、「小倉住」としているのは、当然である。

『二天記』によると、武蔵が小倉に行ったのは、寛永十一年で小笠原忠真に養子の宮本伊織を仕えさせ、自分は客分として数年とどまった。同十四年冬には、島原に切支丹の乱が起り、武蔵と伊織は出陣して、抜群の功績をたてて、後に、伊織は、小倉

小笠原家の家老職となった。寛永十七年、武蔵は、肥後の細川忠利に招かれ、伊織を小倉にとどめて、単身肥後熊本に来て、没年に及んだ。

「無何」というのは、武蔵の俳号であろう。「無何」とは、何もない郷で、無為の仙境を象徴する。莊子の逍遙遊篇の「無何有之郷」に出て、万葉集以来、わが古典作品にも見える。

これを朗詠集に求めると、「酒」の部、「入醉郷」という後中書王（具平親王）の詩句がある。

イフハゲントクニチカウシテカウホニアラズ
邑 隣 二 建 徳 一 非 二 行 歩 一

サカヒハブカニセツシテスナハチサバウス
境 接 二 無 何 一 便 坐 亡。

朗詠集だけに限定しなくともよいが、集中にもある「無何」の語を、俳号にしたところに、武蔵の見識がうかがわれる。

『鉤屑集』に載る、武蔵の、もうひとつの句は、巻二、夏の部の廿九丁裏に、見える。

寺にて雨乞の会に

あみた笠やあのかたら／＼夏の雨 宮本武蔵 無何

これを、朗詠集の「仏寺」の和歌とならべてみよう。

阿耨多羅三藐三菩提の仏達わがたつ袖に名賀あらせたま

へ 伝教大師

「あみた笠や」の句と、この和歌とは、内容的にも非常に近いものがある。「寺にて雨乞の会に」と前がきを置いて、「あみた笠」を「あのか（仰向く）」から、「あみだ如来」を連想

して、「阿耨多羅三藐三菩提の仏達」に、「たらたら」と「夏の雨」が降るように、「名賀（冥加）あらせたまへ」と、雨乞いを祈った武蔵の脳中には、かねて愛読したのであろう和漢朗詠集に見える伝教大師の和歌が濃厚に投影している。新古今集、袋草紙、梁塵秘抄にも出るが、朗詠集より得た教養であろう。

四

『到来集』は、豊前中津の小笠原長勝の藩臣、坂部弥堅、号胡兮が、延宝四年（一六七五）に刊行した五卷四冊の俳諧集である。これは、武蔵没後三十一年に当る。

卷五、付句の「雑部」（十二の裏）の最初に、武蔵の作。

明徳の比聖護院宮消息詞にて

兄弟のなと不快なるらん

梅と菊時分相違のはなさかり

月の明暮 軍をそする

楊貴妃の遊ひはことも夥し

宮本武蔵 信玄（マユ）

この巻五付句は、たいてい二句つづきであるのに、これだけ四句つづきである。四句一連と見るか、前の二句とあとの二句とは別のもので、「梅と菊」の句の下に句主の名を忘れたのかとも考えられる。四句つづきに読むと、第一句の「兄弟」に依じて第二句「梅と菊」とが出てをり、第二句の「はなさかり」から「花軍」の縁で、第三句の「月の明暮、軍をそする」が導き出されているようだから、余り例がないが、四句一連として見ておく。第三句、「月の明暮、軍をそする」というところから、「楊貴妃の夥しい遊ひ」の語が出るあたり、前の「鐘梅」

の句と同じ「貞門俳諧」風の言葉の遊戯である。「玄信」を転倒している。これには、朗詠集との直接の関連は見出せない。

『到来集』の編者、坂部胡兮の藩主、豊前中津八万石の小笠原長次（長勝の父）は、小倉十五万石の小笠原忠真の甥に当る忠真は、兄忠信（長次の父）が大坂夏の陣に戦死したため、小笠原家の当主となり、若くして播州明石十万石に封ぜられた。母は徳川家康の孫娘である。元和四年（一六一八）には明石城が築かれ、それとともに城下町の町割りがなされた。この町割り、いわば都市計画は、そのとき明石にきていた宮本武蔵の設計によったと伝えられる。（注、13）これが事実であれば、武蔵と小笠原氏との結びつきは、「二天記」の記録する「寛永十一年武蔵小倉に至る」より、ずっと早かったことになる。

小笠原長次は、寛永三年（一六二六）、龍野六万石の城主に取立てられた。この取立て、ならびにその前後、なにかと尽力援助しているのは、忠真である。寛永九年（一六三二）八月、忠真は豊前小倉へ、長次は豊前中津へと転封になった。これはこの五月、肥後熊本藩主、加藤忠広（清正の子）が改易を命ぜられたためで、その熊本には小倉の細川忠利が移り、そのあとに、小笠原忠真が据えられた。中津小笠原家が、もと播州竜野の城主であったことから、武蔵のいう「生国播磨」の近隣関係も考えられる。本家、小倉小笠原家の家老は養子の宮本伊織であり、『到来集』の編者、坂部胡兮も、分家、中津藩で相当の地位にあったこと、刊行された延宝四年は、同六年に没した伊織がなお在世中であることなども考えあわせ、ともかく珍しい武蔵の俳諧作品を収め得たものと思われる。

『鉤屑集』の編者、岡本仁意胤及は、「医師」とも「絵師」ともいわれる。その住地、備前の片上は、武蔵の出生地の一つに擬せられる美作国の宮本（現在、岡山県英田郡大原町宮本）とも、なんらかの地理的関連があるかもしれない。距離的には播州出生地説の宮本（現在、兵庫県揖保郡太子町宮本）の方が近い。播州の宮本と竜野との距離は約八杆ときわめて近い。『鉤屑集』、『到来集』の二集とも、それぞれの背景を持つて、武蔵の俳諧作品をおさめている。

五

『和漢朗詠集』上下二巻は、藤原公任（九六六—一〇四一）の撰である。

この和漢の学識をもつ「当時第一流の才人」四条大納言の編著は、他の文芸作品とちがった流行の相をもって展開した。

和歌と漢詩文の句をおさめているため、一方では文芸的な教養を身につけるテキストに用いられ、一方では、漢字と仮名の両様をそなえているため、習字の Handbook として珍重されてきている。藤原定家の『明月記』に、「昨今書ニ朗詠上巻一又点レ之為「小童読書也」とあることでも、これらは理解される。伝行成筆などの名筆がきわめて多いことも、他の文芸作品の及ばないところである。（注、14）

山田孝雄先生は、和漢朗詠集を、御物本行成卿筆の本文で校訂され、昭和三年に、「日本歌謡集成」巻三に、昭和五年には岩波文庫に収められた。そして昭和六年（一九三一）に、岩波講座、日本文学の、『倭漢朗詠集』において、すぐれた見解を

いくつも述べておられる。

それが古写本の徳川時代以前のものを見ても三十種以上になるであらうし、徳川時代の板本も亦頗る多い。かくの如く莫大な数に達してゐるのを見ても本書が世上に有する勢力の頗る大であつた事を見るべきであらう。

古写本だけでなく、板本、付訓本、頭注本、絵入本など、すこぶる多いのも、和漢朗詠集に見られる特色である。

その、刊本について、述べたもので、伊藤壽一、堀部正二両氏の『和漢朗詠集山城切解説及釈文』（昭和十四年）を引いてみよう。

刊本としては西班牙国エスコリヤルなるサン・ロレンソ王室御文庫蔵の日本耶蘇会版（慶長五年）や慶長中期の刊行に係る整版本（二巻二冊無刊記本）を始め、寛永五年・同十九年等約二十余种が重版されてゐるが、これらも多くは手習用と思しくて文字も大きい。

右の刊本出版の時期、慶長から寛永は、ちょうど宮本武蔵の生きた時代である。

慶長五年（一六〇〇）、『日本耶蘇会のコレジオに於いて』「倭漢朗詠集巻之上」一冊が、美しい吉利支丹版で刊行されたことは、当時、朗詠集流行の一面を如実に物語って興味深い。碧眼紅毛の南蛮人にまで普及したことは、編者も予想しなかつたことだろう。（注、15）

このころ、武蔵は十七才。その九月には、例の関が原の合戦があつた年である。

朗詠集と武蔵との出会い、それが、いつ、どこで、なんのためか、もちろん、よくわからない。刊本で読んだか、写本でし
たしんだのか、それもわからない。「新免武蔵先生伝記」には
「先師十三才、其比」「例ノ如ク手筆ノ師ノ方ニ行ク」という
記事があるが、朗詠集を学んだか、どうか、これもわからない。
ただ、彼の若年のころ、吉利支丹版にまで、刊行される、朗詠
集の時代であったことに注目したい。

六

「寒流帯月澄如鏡」という、和漢朗詠集の一詩句をもって、
「戦気」につけた、武蔵の心事について、考えてみよう。
和漢朗詠集には、朗詠句題和歌が多く作られている。
いま、「寒流帯月澄如鏡」を題にしたものをあげると、

月故ぞ水は鏡と成にける木の葉隠れを払ふ波間に

〈慈円 拾玉集四 詠百首和歌 冬〉

山水にさえゆく月の増鏡凍らずとも流るともみず

〈藤原定家 拾遺愚草員外〉

いほさきのすみだかはらの川風に水のかがみみがく月かけ

〈土御門院御集 〉

こほりわけながれにすめる月かけはたましくしげなる鏡とぞ

みる
〈前中納言匡房 夫木和歌集 鏡〉

(注、16)

これらは、どの歌をよんで見ても、歌よみが、ただ、観念的
に、ことばをもて遊んでいるだけである。そこには、作者、そ

の人の個性がにじみ出る何もないようである。仮に、作者の
名を伏せた場合、個人差というものがみとめられるだろうか。

武蔵が、「戦気」にそえたことは、あきらかに差異がある。
これには、武蔵その人の個性が、強烈に、にじみ出ている。

そして、「寒流帯月澄如鏡」だけでなく、「五輪書」に使用
している「水に碧潭の色あり」、「あみだ笠やあのくたらたら夏の
雨」の句、「鐘梅のさきとをれかな春三月」の「春三月」、「
春風桃李……」の詩句を、「悟道の妙境」としたことを物語る。
これらはみな、武蔵が、朗詠集を、愛読したことを物語る。

朗詠集の流行はともかく、謡曲、その他の文芸作品から得た
教養とも反論されるかもしれない。「春風桃李……」はよく他
にも引用されるが、この「寒流帯月澄如鏡」だけは、謡曲にも
平家物語にも見当らない。孫引きや聞きかじりの知識や教養で
はなく、武蔵の、朗詠集愛好から、自然に、ほとばしり出たも
のであろう。

「二天一流」の兵法の道(二刀流を彼はこういう)を独創し
「兵法の利にまかせて諸芸諸能の道となせば、万事におゐて我
に師匠なし」と「五輪書」の序文でいきている。絵画・彫刻・書
跡・細工などにも、すぐれた才能をもっていたことは、今も残
る数々の芸術作品にうかがわれる。

天才、宮本武蔵は、「なにごとにもすぐれめでたくおほしま
す」藤原公任の撰んだ、「和漢朗詠集」を、もっともよく、味
読した、ひとりである。

注

- 1 拙稿、宮本武蔵の「独行道」(語文研究、第二十四号)
- 2 3 4 「宮本武蔵」(宮本武蔵遺蹟顕彰会編、池辺義象著) 付録、一頁、一一一頁、七頁。
- 5 和漢朗詠集の引用はすべて、山田孝雄校訂、岩波文庫
- 6 「五論書」細川本(岩波文庫)以下同じ。
- 7 肥後文献叢書、第二巻、「二天記」とともに登載。
- 8 「新免武蔵先生伝記」(武士道全書、第八巻二六四頁)
- 9 「撃劍叢談」巻之四(武術叢書、一九五頁)
- 10 「画人宮本武蔵」添田達嶺著、雄山閣、一〇一頁
- 11 「隨筆宮本武蔵」吉川英治著 講談社 六五頁
- 12 「匏屑集」の「句引」には「京」の住に「妙心寺大淵和尚」と右肩に注記した「玄弘 二」がある。大淵和尚といえは、細川家の招きで肥後にきて、寛永十九年(一六四二)泰勝寺(いま熊本市、竜田山の麓に遺跡がある)の第一世になっている。もと、泰勝院といったが、これは細川家中興の祖、細川藤孝(幽斎)の法名から出ている。大淵が、武蔵の死後の法事を執行したことは、藩老長岡監物と小倉の宮本伊織との往復書簡(肥後文献叢書、第二巻)にあきらかである。(「二天記」で導師を二世の春山とするのはあやまり)『肥後国誌』(森本一端編、明和九年(一七七二))には大淵の記述がいくつかあるが、くいちがいも見える。泰勝寺の開山となり「在住十二年承応二年七月九日遷化六十六才」と、「勢州ノ産ニテ和州顕孝寺ニ住ス檀越片桐東市正且元没落ノ後大淵備前ニ在シテ光尚君ノ招キニ依テ立田泰勝寺ニ住シ」に注目したい。「備前ニ在」ったことが、『匏屑集』と縁があるのか。なお、『小倉碑文』の建碑は承応三年で、大淵が没していたた

め、二世春山の撰文となったものと思われる。春山が「小倉碑文」を書いていたので、「二天記」の筆者は、導師を春山とあやまり、吉川英治氏もまた、「春山和尚考」(『隨筆宮本武蔵』二六七頁)で、よくわからぬと歎息された。大淵が、武蔵より四才ほど年下になるから、二世の春山はそれよりさらに若かっただろう。「春山和尚に縁り」という「二天記」の記述は、はたして真実だろうか。

13 『明石市史』上 黒田義隆編

14 「和漢朗詠集の成立と古写本」堀江知彦(平凡社、書道全集、第十三巻、日本、平安Ⅲ)には、写真版入りで、くわしい説明がなされている。

15 「和漢朗詠集」川口久雄校注(岩波書店、日本古典文学大系七十三)と、同月報(第二期、第10回配本)「エル、エスコリアル訪書紀行」とに、世界の孤本倭漢朗詠集巻之上が、写真版を添えて、紹介してある。

16 柿村重松註『和漢朗詠集考證』の、歳暮、塞流帶月澄如鏡夕吹和霜利似刀の「資考」にもとづく。(三二二頁)

なお、和漢朗詠集について、その詳細は、別稿、「和漢朗詠集と古今和歌六帖」に譲りたい。

本稿は、前稿「宮本武蔵の「独行道」」とともに、九州大学教授中村幸彦博士から終始懇切なご指導を受けました。ここに、篤く感謝いたします。

(44・1・19)